

Title	室町時代の禅宗と文化受容
Author(s)	芳澤, 元
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60045
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	芳澤 元
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 26049 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	室町時代の禅宗と文化受容
論文審査委員	(主査) 教授 平 雅行 (副査) 教授 川合 康 教授 村田 路人

論文内容の要旨

本論文は、室町時代を中心に、中世禅宗の多様な文化事象を社会と宗教の関わりの中かで捉えようとしたものである。本文は 2 部 6 章と序章・終章とから成り、枚数は 485 枚(400 字詰め換算)である。

まず序章では、禅宗史をめぐる戦前からの研究史を振り返り、玉村竹二氏の禅宗墮落論を克服するには、生活文化史や宗教社会史からの検討が必要であると述べている。第 I 部「中世禅宗史と宗教社会史」の第 1 章では、鎌倉後期禅林における文芸を取りあげた。南溪道隆は坐禅を重視し文芸活動を否定したが、実際にはむしろ文芸が非常に盛んであった。その理由は、漢詩文や漢文に秀でた人材育成が社会から求められており、禅宗寺院がその需要を満たす社会的機能を果たしたことにあったとし、文芸の広まりを禅林の墮落とする議論に是正を迫っている。

第 2 章では、中世禅林で飲酒が盛んであった実態を明らかにした。そして、その背景に、①乗急戒緩の慧学至上主義の風潮があったこと、②将軍家仏事では恒例的に慰労として酒宴の席が設けられていたことを挙げている。第 3 章では、室町武家と禅宗との関わりを検討した。そして、①武家は禅院の寺庵・寮舎を模倣した庵居を山荘に設け、また禅僧となった武家子弟のために、禅林内に独立した寺庵・寮舎を建造し、これらが都鄙間の文化的政治的交渉の場として機能していた、②出家後も世俗で政治・経済活動を継続する武家たちを禅宗は居士として包摂し、肖像画贊や仏事法語で彼らの家業への貢献を賞賛して、僧俗中間的な居士の諸活動を積極的に評価した、と論じている。

第 II 部「文芸資料にみる文化受容」の第 1 章・第 2 章では渡唐天神説話をとりあげた。

そして渡唐天神像とその賛頌の文化史的背景を検討して、禅僧における天神信仰や神祇化度説話の展開、大内盛見と渡唐天神像との関わり、將軍義持の天神信仰などを検討して、室町殿と守護との間で展開された多面的な文化交渉の実態を明らかにするとともに、中国の士大夫層と日本留学僧との間で北野天神観が共有されていたことを指摘している。第3章では、前田利家夫人が複製を命じた女人図をとりあげ、五名の禅僧による着賛の過程を復元するとともに、これを元和期における室町文芸の復興活動の一環として位置づけている。

終章では本論を概括し、今後の課題を展望した。

論文審査の結果の要旨

本論文の第一の成果は、五山文学の漢文史料や肖像画などの美術史料を歴史史料として活用することによって、中世禅林の実態を明らかにしたことである。第一部では、蘭溪道隆の誠めにもかかわらず、鎌倉後期禅林においても、文芸が非常に盛んであった事実を明らかにして、その背景に、漢詩文の作成能力に社会的需要があったこと、入門時に作頌試験を実施して禅僧の資質維持に努めていたことが関わっていると論じた。また第二部では、渡唐天神像や前田利家夫人の女人図をとりあげ、その漢詩や絵像を丹念に読み解きながら、それらの作品を歴史的文化的背景のなかに位置づけている。禅僧が作成した漢詩文は、史料読解の困難さもあって、歴史研究での活用が十分でなかったが、申請者は高い読解力と丹念で緻密な考証によって、それを活用して中世禅林の実態解明を行うことに成功した。

第二の成果は、室町禅林と武家社会との相互交流の実態を具体化するとともに、その思想的背景を明らかにしたことである。武家の山荘と禅林の寺庵・寮舎との密接なつながりを解明するとともに、禅僧が居士の法体肖像画の賛で、居士の家業への貢献を賞賛しており、その背景に凡聖不二・僧俗一体をとく本覚思想があったと述べている。また、中世禅林における飲酒の背景に、將軍家仏事における酒宴の振るまいがあったことや、中世禅僧たちが戒律を必ずしも絶対視しない乗急戒緩の考えをとっていたことがあると指摘している。これらはともすれば禅宗墮落論として語られがちな事象であるが、そうした事象の思想的社会的背景をきちんと明らかにした。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。中世禅林の諸事象を顕密仏教を含めた仏教界全体のなかに位置づける作業はまだ不十分であるし、自らの個別研究の達成を禅宗研究の方法論一般に昇華させる点においても、なお課題を残している。しかし申請者が若手研究者であることに鑑みれば、本論文の達成をもとに、今後、自らの構想をさらに深めてゆくことが期待される。本論文はその基礎となる価値を十分に有している。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。